指導計画案

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	1 作品の周辺事情について必要事項を理解させる。話の展開、大枠をつかませる。 2 主人公の人物像や、情景・動植物に関連する心情を理解させる。 3	①「城の崎にて」が発表された大正時代と現代の異なっている部分を理解する。 知技 ②全体を通読し、作品全体が城崎温泉での出来事であることを理解する。 知技 ③場面分けと並行し、動植物や風景描写を見つけたら、本文中に傍線を引く。 知技・思判表	①教科書の注釈や写真などを利用しながら、明治から大正時代にかけての風俗（湯治や住居・生活の様子など）、ものの考え方（白樺派へいたる文学史など）を中心に解説する。作家史に触れてもよいが、生徒に先入観を与えないためにも、この時点で「城の崎にて」が志賀直哉の実体験を元にしていることを強調しすぎないように注意する。 ②難読文字や新出語の確認（プリントによる事前課題としておいてもよい）と合わせ、作品全体が城崎温泉での出来事であり、主人公が滞在を振り返る形で語られている、いわゆる入れ籠構造になっていることに気づかせる。 ③動植物や風景描写の描かれ方に注目させるだけでも良い。「三つの小動物の死」で文章を分けられることに学習者が自発的に気づくことを意図し、ここで「三つの小動物の死」による場面分けは指示せず、時や場所の変化による場面分け（「構成」の項目を参照）程度でとどめておきたい。
展開	1 周囲の事物の描写方法と、それらから想起した心情を読み取らせる。 2 蜂・ねずみ・いもりの三つの死が主人公の心情にいかに関連しているかを理解させる。 3 主人公の死生観の変容を読み取らせる。	①〈第一段〉（初め～一九八・7）第一節・第二節 主人公の人物像を理解する。 ②「寂しい」「静か」という言葉に注目し、それらが強調する意味の違いについて考える。 知技 ③「死に対する親しみ」について考える。 思判表 ①〈第二段〉（一九八・8～二〇〇・9）主人公が蜂の死骸をどのようにとらえたか考える。 思判表	①城崎温泉でおきる出来事や風景を観察し、内省を重ねながら生死についての感想を変容させていく人物像を読み取る。 ②傷の治癒の具合によっては致命傷になるかもしれず、城崎温泉滞在時における主人公の状態が、普段以上に他者（電車の事故、あるいは診断した医者）によって「死」を意識させられた「生」であることに気づかせる。また、秋の風景や小さな生き物、祖父や母の死骸など、「寂しい」「静か」と直接関わる風物の持つイメージにも注目させ、それらのもつ効果についても考えさせる。 ③「死に対する親しみ」から、主人公の「死」と「生」の捉え方の違いに気づかせる。主人公にとって「死」が恐怖の対象ではなく、かつ事故に遭ってから身近に感じられる事象になったことに気づかせる。 ①生きている蜂と死んだ蜂の描写の対比から「いかにも」と生（あるいは死）に対する感想を強調している主人公の語りに注目させる。蜂という具体例をもとにして、死生観に関する主人公の考えが具体的・輻輳的に語られていることに気づかせる。

展開			時限
			指導上の重点目標
②　死んだ蜂に対して感じた「親しみ」を考える。思判表 ③　蜂の死から感じたことと「范の犯罪」で考えたことが接続する効果を考える。思判表	①　〈第三段〉（二〇〇・10～二〇三・5）ねずみの一連の動作を見たときの「寂しい嫌な気持ち」について考える。思判表 ②　ねずみが「死に到達する」までの苦しみや動騒に関する恐ろしさの実感について考える。思判表 ③　ねずみの様子と比較して主人公が自分の場合をどのように回想しているか理解する。思判表	①　〈第四段〉第一節・第二節・〈第五段〉（二〇三・6～二〇六・4）桑の木の描写や、いもりに対する好悪の判断部分から作者の表現の特徴を考える。知技 ②　主人公が投げた石がどのような結果をもたらし、それについてどう考えているかを理解する。思判表 ③　「生き物の寂しさ」とは何か、そこから主人公はどのようなことを考えているかを理解する。思判表	学習活動
②　蜂の死骸を見て、第一段で「祖父や母の死骸」から連想した死のイメージを改めて想起し、「親しみ」を感じていることに気づかせる。 「死骸」＝「墓の下にいる、その静かさ」が、蜂の死と「范の犯罪」における「殺されたる妻」との二つをつなげていることを気づかせる。ここでも死生観に関する主人公の考えが輻輳的に語られていることを理解させる。	①　死に静かさを感じていた主人公が、殺されまいと全力を尽くして逃げ回っているねずみの姿を見て、死の前にある「苦しい」「恐ろしい」ものをつきつけられたと感じていることを理解させる。 ②　ねずみも人間もともに死に近い状況でなんとかして生きようともがく点で共通していると、主人公が自分の姿をねずみに重ね合わせて考えていることを読み取らせる。この段階で「学習のポイント1」に取り組んでもよい。 ③　もうじき死ぬであろう事を予感させながらも必死にあがいている動騒を恐ろしく思い、同時にその動騒が事故に遭い生きようとした自らの姿に重なることを改めて回想し、語っていることに気づかせる。	①　風景や状況をどのように描いているかや、文末表現に注目させる。この段階で「学習のポイント3」の前半部分（～抜き出してみよう。）に取り組んでもよい。 ②　石はいもりを狙うつもりもなく投げられたが、偶然に当たったいもりは死んでしまった。そこから主人公は生死が偶然によって左右されると認識したことを理解させる。 ③　主人公は、人間を含んだ動物全てに生き死にがあり、それはそれほど差のないことだと思い至った。「生き物の寂しさ」は、偶然によって生命が支配されていることからは誰もが逃れられない点から考え出されていることや、生と死が「両極のものでなかった」と考えていることを理解させる。	指導上の留意点

まとめと発展	時限
2	1
文章全体における様々な事物・心情の描写のされ方が与える効果を考えさせる。 文末表現などの文体の特徴と効果を考えさせる。	指導上の重点目標
③	②	①
読書指導を通じて作者の著作について学ぶ。思判表	文章全体の流れから、各段落相互の働きと関係を明らかにし、第一段と第五段の対応について考える。主態	場面分けの再確認をする。主 態	学習活動
③	②	①
志賀直哉の経歴や文学史上での業績に注目させる。「参考」の項に掲載された志賀直哉の日記などを利用しながら、志賀直哉の実体験と照らし合わせた読解を紹介してもよい。	全ての段落がいもりの死とその後の主人公の感慨の伏線となっていることに気づかせる。また各描写の水準でも、どの描写がどの心情に収斂しているかを確認する。その上で「三週間以上――我慢できたら五週間くらいいたいものだ」と「三週間にて、自分はここを去った」の入れ籠構造に注目しながら、主人公の死生観の変容について考える。この部分に注目してアクティブラーニングを計画してもよい。	文章全体を貫くテーマとして「死生観」があることを確認した上で、改めて導入③で行った場面分けを考え直させる。	指導上の留意点